

Vanity Fair

——ベッキー・シャープの人物描写と
時代の肖像としての作品の性格——

吉 田 一 穂

序

タイトルとアンチ・ヒロインのモデルまでは決まっていたものの、当初サッカレー (William Makepeace Thackeray, 1811-63) は、*Vanity Fair* (1847-48) を3巻本にするか、続き物にするか、決めかねていたようだ。彼は作品を持って有名なヘンリー・コルバーン (Henry Colburn) 社を含めて少なくとも3つか4つの出版社を回ったが、相手にしてくれなかったのが、現在 *Dombey and Son* (1848) の出版を手がけているブラッドリー・アンド・エヴァンズ (Bradbury and Evans) 社にあたってみた。あたってみたところ、彼らはディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) のときと同じくらい熱烈に、彼と手を組みたがり、サッカレーは、毎月の号ごとに50ギニーという金額を得た。もっともブラッドリー・アンド・エヴァンズ社は、ディケンズのときのように、続き物全体に対する支払いの保証はしなかったが、とにかく1847年1月、ブラッドリー・アンド・エヴァンズ社は、*Vanity Fair* の第1号を発行した (Pool 55-56)。¹

作品においてひとときわ生彩を放つ人物がいる。それはベッキー・シャープ (Becky Sharp) である。ダレスキー (H. M. Daleski) は、「ベッキーとアミリア (Amelia) を取り扱うに際し、コントラストの原理を巧みに用いることによりサッカレーは小説に若干の統一をもたらししている」と指摘している (Daleski 137)。また、マライア・ディバティスタ (Maria DiBattista) は、

「ベッキーのひどい性格は、悪魔のような邪悪な女性になる可能性を示している」、[「アミーリアは、ヴィクトリア朝時代の女性の理想の犠牲者であり、自身の人生を愛する人のなきがらに捧げる」(DiBattista 93)と述べている。しかし、アミーリア・セドリ (Amelia Sedley) と対照的な女性としてベッキーを表現するほどには、サッカレーはベッキーを悪者として取り扱っていないことに注目しなければならない。このことに注目しなければ、サッカレーの真意を把握できないからである。

本論文では、サッカレーが *Vanity Fair* においてベッキーをいかなる人物として表現したのかについて述べてみたい。

1. 結婚までのベッキー

Vanity Fair におけるベッキーの人生は大きく二つの時期に分けられる。すなわち、社会的栄達に至るまでと社会的栄達後である。まず、社会的栄達に至るまでの時期について考えてみたい。

物語は、アミーリア・セドリがピンカートン (Pinkerton) 女史の経営する女学校で教育を終え、ベッキーに付き添われて家へ帰ろうとするところから幕を開ける。アミーリアは、善良で心の優しい女性であるが、残念ながら彼女はこの物語の真のヒロインではない。本当のヒロインは、優しくも善良でもないベッキーである。² ベッキーは画家とフランスの歌劇女優を両親に持っていたが、今は亡くなっていて、貧しい彼女は一人でこの世を渡っていかなければならなかった。そのためベッキーは早熟になり、人の気に入られるためには自分を隠し、演技もいとわなかったのである。2年間ピンカートン女史の学校で彼女から侮辱と虐待を受け続けたと感じたベッキーは、アミーリアに次のように語る。

‘I have been treated worse than any servant in the kitchen. I have never had a friend or a kind word, except from you. I have been made to tend the little girls in the lower schoolroom, and to talk French to the Misses, until I grew

sick of my mother-tongue. But that talking French to Miss Pinkerton was capital fun, wasn't it? She doesn't know a word of French, and was too proud to confess it. I believe it was that which made her part with me; and so thank heaven for French. *Vive la France! Vive l'Empereur! Vive Bonaparte!*' (47)

私は台所のどの召使いよりも冷遇されてきたわ。私はあなたの他一人の友達もなく、やさしい言葉一つかけてくれる人もなかったわ。私は下の教室の小さな生徒たちの面倒を見させられ、お嬢さんたち相手には、いくら母国語だっていやになってしまうほどフランス語をしゃべらされたわ。でもピンカートンさんにフランス語で話しかけてやるのは、とても面白かったわねえ、どう？ あの人フランス語を一言もわからないくせに、プライドが高すぎてそれを白状しないんですものねえ。私を追い出したのは、きっとそのせいよ、だからフランス語には感謝しているのよ。フランス万歳！ 皇帝万歳！ ボナパルト万歳！

引用には、フランス語の解らないピンカートン女史にフランス語で話しかけることの痛快さがうかがえる一方、ベッキーがフランス語ができることが自身の価値であると認識していることがうかがえる。サッカレーは、「その当時英国で『ボナパルト万歳！』と言うことは、『悪魔万歳！』と言うにも等しかったのだ」(47)と述べている。このサッカレーの説明に時代背景がうかがえる。サッカレーは1811年、革命の不安の時代に生まれた。国際的には、その時代の顕著な人物はナポレオン (Napoleon) であり、彼の軍隊は、ヨーロッパの大部分を支配下に置き、イギリスは、1815年ワータルロー (Waterloo) で彼が敗北するまで彼と交戦状態にあった。国内的には、最も顕著な人物は1811年から1820年まで摂政王であり、1820年から1830年まで王であったジョージ (George) であり、彼の放縦なダンディズムは範とすべき一つのひな型であり、彼の在位期間が *Vanity Fair* の背景として用いられて

いる。³

このような時代の中、孤児であるベッキーは自分の力だけで生き抜いていかなければならないが、彼女には一人で生きていくすべがあった。それはフランス語と音楽である。ベッキーはこの二つの能力があるがゆえにピンカートン女塾で重用され、ピンカートン女史と折合いが悪くなってから働くことになるピット・クローリー (Pitt Crawley) 卿の家でも家庭教師として重用されるのである。クローリー卿の家に行く前、ベッキーは裕福な株式商であるアミーリアの家にしばらく滞在することになり、そこでアミーリアの兄ジョセフ (Joseph) と初めて出会う。ジョセフは、東インド会社の役人であり、その当時の「東インド記録」のベンゴール (Bengal) の部にボグリー・ウォラ (Boggley Wollah) の収税関として名前が載っている人物である。これは地方長官を兼ねたような、名誉ある、実入りの多い地位であった。ベッキーは、この伊達者をものにしようとひそかに決心する。サッカレーはベッキーの決心について「世の御婦人たちよ、我々は彼女を責める権利はないと思うのです」(57) と述べ、ベッキーに婿さがしをしてくれる親がないこと、また、若い婦人たちを社交界に出させるものが結婚という野心以外にないことを理由として挙げている。結婚の申し込みを期待していたベッキーだったが、パンチを飲みすぎて酔っ払ったジョセフは求婚どころではなくなり、数日後セドリ家に届いた彼からの手紙には、体調が戻ったらできるだけ早くスコットランドへ旅立つつもりだと書かれてあった。

これで、ベッキーがセドリ家にとどまる理由がなくなり、彼女は、二人の女の子の家庭教師としてクローリー家に勤める。クローリー家の主人は、准男爵サー・ピット・クローリーで、それまでベッキーが出会ったことのない程の地位の人物である。彼女はクローリー家の人々に好かれるように力の及ぶ限り信任を得るようつとめる。すぐ六の相手や手紙の清書や愉快な話相手となることで、彼女はクイーンズ・クローリーへ来てから一年とたたないうちに准男爵の信任を得てしまう。ベッキーが家庭教師として担当したのは、ピット卿とローザ (Rosa) の間にできた女の子であるが、ピット卿には前妻グリズル

(Grizzel) との間に二人の息子がいた。長男のピット氏は立派な紳士で、オックスフォード大学を出た後、ピンキー (Binkie) 卿の秘書をした後、公使館員として務めたが、昇進が遅いので公使館員をやめ、奴隷解放運動に首をつっこんだり、ウィルバーフォース (William Wilberforce, 1759-1833) に近づいたり、⁴ サイラス・ホーンブロウア (Silas Hornblower) 師との間に西部アフリカのアシャンティー (Ashantee) 王国の伝道に関する書簡の往復をする。このような野心的なピット氏は、ジェイン・シープシャンクス (Jane Sheepshanks) に心を寄せているがゆえにベッキーとは友人どまりであるが、彼にはロードン・クロリー (Rawdon Crawley) という弟がいる。ロードンはクロリー老嬢に気に入られ、兄がオックスフォードにいたので、彼女はその反対に彼をケンブリッジに入れてくれ、退職後は金を出して近衛騎兵将校にしてくれたのであった。注目に値することは、サーカレーがロードンのことを「申し分のないだて男、すなわちダンディー」(‘A perfect and celebrated ‘blood’ and dandy about town’) (130) と表現していることである。レディー・クロリーが亡くなったときピット卿が現れ、ベッキーに帰ってきて欲しいと頼み、彼女の足元にひざまずいて結婚の申し込みをするが、彼女はすでにロードンと密かに結婚していたがゆえにこの申し出を断る。ベッキーがピット卿と結婚するというプロットを組むことも可能だったにもかかわらず、ピット卿でなくダンディーのロードンと結婚するというプロットを組んだところにサッカレーの意図が感じられる。

イギリス文学史におけるロマン主義時代の後半を取り込んだ数十年(大ざっぱには1810-30)は、社会史的には摂政時代と呼ばれている。摂政時代は、皇太子の肥満した肉体と放蕩によって体現される時代で、彼は狂気の王ジョージ3世時代最後の数年間摂政を務めた後、先に述べたように1820年から1830年にかけてジョージ4世として自ら統治した。この時代は、ろくでなしの貴族階級、それに彼らの真似をしたがる庶民階級の一部が、王政復古時代を彷彿とさせる気風のなかに18世紀上流社会の優美さを復活させようとした試みで記憶されている。これは、また金持ち、そして数の上では彼らに劣ら

ず多かった将来の遺産相続を頼みに際限なく、つけて買物をするような連中にとっては、洒落者ブランメル (Brummell) に触発されてその気になれば優雅さを誇りもし、また気が変われば、野卑、俗悪、かつ不品行にもなるといったダンディーの時代であった (Altick 9)。このことから、作品の中でベッキーをダンディーと結婚させることにより、サッカレーはこの時代のダンディーとその妻を諷刺しようとしたと考えられるが、サッカレーが二人を結婚させた理由はそれだけではないように思われる。

かつてクロリー老嬢は、ベッキーに「私はどこかの身分ある人があんたと駆け落ちでもすればいいと思っているんだよ」、「ロードンが誰かと逃げてくれればいいと祈っていますよ」(143) と言っていたが、クロリー老嬢から見れば年に4000ポンドの収入のある准男爵との結婚こそベッキーにふさわしい結婚であり、多くの借金のあるロードンは、金持ち娘と結婚することこそ望ましいことであった。クロリー老嬢の価値観は、サッカレーが「虚栄の市の人々は、全く自然に金持ちに集まっていく」(248) と述べていることから、虚栄の市の金を中心とした価値観であると言える。ジョージ・オズボーン (George Osborn) の父親もクロリー老嬢と同じ価値観を持ち、息子が財産を失ったセドリ (Sedley) の娘アミーリアと結婚することに反対する。しかし、ジョージは父親の反対にもかかわらずアミーリアと結婚する。ベッキーも多くの借金のあるロードンと結婚するが、サッカレーがベッキーをロードンと結婚させた理由は、ダンディーとその妻を諷刺することの外に作品の中におけるベッキーの可動性にあると考えられる。ドロシー・ヴァン・гент (Dorothy Van Ghent) は、ベッキーの生まれ、すなわち、自由奔放な画家とフランス人の歌劇女優との間に生まれた娘であることに注目している。гентは、ベッキーが階級から自由な存在であるがゆえに他の登場人物より可動性があり、幅広い階級関係に入っていけると考え、「このことは悪漢の長所であり、ピカレスク形式の迫力の源、すなわち、主人公の動きの自由である。文明化社会に支配的な風潮のもとで行動しながらも、ベッキーは階級的仮面をつけずに社会の傾向を表現できる」と述べている (Ghent 11)。

ベッキーの可動性についても一つ考えられることは、彼女が戦争によって夫につきそってベルギーに行かなければならなくなることである。すなわち、イギリスから外国へ移動することにより、国外情勢と国外での彼女の姿をも読者に伝えることができるのだ。サッカレーは、イギリス軍の指揮をとるウェリントン (Duke of Wellington, 1769-1852) について触れ、「全英国民がウェリントン公に対して感じていた固い信頼の念は、一時フランス人がナポレオンに対して抱いていた情熱ほど熱狂的ではなかったにしても、その強さにおいては、劣るものではなかった」(325) と国民が総司令官としてのウェリントンを信じ切っている様子を伝えている。注目すべきことは、ベッキーがジョセフに「男の方はどなたにしろ、後に残った哀れな女の心配や苦しみなんか一向気にもなさないんですからねえ」(363) と戦争で後に残された女性の気持ちを表現する一方で、ジョセフに馬を売って作り出した金、ロードンの持物を売って取れる金、ロードンが戦死した場合の遺族扶助料で未亡人となっても平気だと思うことである。このことから、ベッキーが強かで生き残るための計算を常にする女性であることは明らかである。

サッカレーはワーテルローの戦いの戦況を簡単に説明している。数に劣るウェリントン軍はフランス軍の猛攻の前にじりじりと後退した。イギリス軍にとどめをさすべくナポレオンが近衛隊の投入を命じた直後、プロイセン軍がワーテルローに到着し、フランス軍の側面へ猛攻をかけた。さらにイギリス軍が反撃し、フランス軍は潰走した。運命の皮肉は、アミーリアの夫ジョージが心臓に一弾を受けて死んでしまう一方、ベッキーの夫ロードンが中佐に昇進することである。このことにより、ベッキーの社会的願望がさらに満たされることになる。作品において自己犠牲的で控え目な女性アミーリアこそ報われてしかるべきなのに、どうして計算高いベッキーが報われるのであろうか？

2. 戦争後のベッキー

シーモア・ベッキー (Seymour Betsky) は、サッカレーがベッキーという

あやつり人形に愛着を感じていることを指摘するだけでなく、「ベッキーの罪、それはサッカレーの基準で最もひどい罪であるが、忠実な愛情を持つことができないことである。しかし、サッカレーはベッキーをあまり苦しめない」と述べている (Betsy 143)。これにはベッキーの可動性が関係していると思われる。ベッキーとロードンはワーテルローの戦いの後1815年パリで暮らす。ベッキーのパリにおける成功は目覚しく、フランスの婦人たちは皆彼女のことを素敵だと言う。ベッキーはフランス語がうまく、フランス婦人の上品さや、行儀のよさをすぐ自分のものとしてしまう。ベッキーが英国婦人の中では一番華やかで、一番人気があるので、ベアレイカズ (Bareacres) 夫人その他英国社交界を代表する夫人たちは、駆け出しのベッキーの成功を見てくやしがる。

So in *fêtes*, pleasures, and prosperity, the winter of 1815-16 passed away with Mrs Rawdon Crawley, who accommodated herself to polite life as if her ancestors had been people of fashion for centuries past—and who from her wit, talent and energy, indeed merited a place of honour in Vanity Fair. In the early spring of 1816, *Galignani's Journal* contained the following announcement in an interesting corner of the paper: 'On the 26th of March—the Lady of Lieutenant-Golonel Crawley, of the Life Guards Green—of a son and heir.' (414)

こうして、1815年から16年へかけての冬はロードン・クローリ夫人にとって、饗宴と快樂と繁榮とのうちに過ぎた。彼女はまるで祖先が過去数世紀にわたって上流社会に属していたかのように、そうした社会の生活が板についていた——そしてまた、彼女はその頭のよさや才能や精力から言うと、実際虚栄の市の名譽ある地位に座る資格はあったのである。1816年の春の初めには、ガリニャーニ新聞の出産欄に、次のような記事が出た。『3月26日——英国近衛騎兵中佐クローリ氏令夫人——嫡男子

出産。』

引用の「彼女はその頭よさや才能や精力から言うと、実際、虚栄の市の名誉ある地位に座る資格はあったのである」という箇所は、サッカレーの意図を端的に示している。ウルフガング・イーザー (Wolfgang Iser) は、「ベッキーは社会的上昇を求める大きな本能を持っていて、作品を読む人は、彼女のふるまいが持続することを期待する」とベッキーの描写と読者との関係を指摘する一方、「ベッキーのこの願望は、彼女が社会の異なる階層によってなされる様々な要求に彼女のふるまいを順応させることを要求する」と述べている (Iser 45)。イーザーの見解は、ベッキーの願望がどうあろうと彼女にある程度の自助努力が必要であることを示している。ダニエル・プール (Daniel Pool) は、結婚することで教え子の家庭に入り込んだ家庭教師を描いた小説ということで *Vanity Fair* と *Jane Eyre* (1847) が類似していることを指摘しているが (Pool 71), *Vanity Fair* におけるベッキーの可動性は、*Jane Eyre* におけるジェインの可動性をはるかに上回っていて、このことは、フランス語という能力だけでなく様々な局面に対処する能力をもベッキーが必要とすることを意味している。このことにより、ベッキーの可動性を通してサッカレーが一女性の可動性を示したと考えられる。

ベッキーの可動性の持つ別の側面として、ロバート・E・ラウジー (Robert E. Lougy) は、ベッキーが周囲の病んだ世界を具体化するという側面を持っていることに注目している (Lougy 68)。ベッキーの夫が健在である一方で、アミーリアの夫が戦争で死んでしまうことによりサッカレーは両者の対照的な運命を描いているが、見落としてはならないことは、老オズボーンが息子ジョージの遺骸が埋められた場所が本堂や塔やローマ正教徒の埋めである花や灌木の植わった墓地とは小さな生垣で隔てられた神聖でない地域であることを心外に思うことである。老オズボーンは、英国紳士であり、英国陸軍の大尉ともあろう自分の息子はもっとしかるべき場所に埋められるべきだと思っている。さらに老オズボーンは、自身の希望と誇りを覆したア

ミーリアを息子の死後も憎んでいる。このことは、老オズボーンが虚栄心に縛られていて、虚栄心に基づいた考えをしていることを示している。一方で、パリの社交界を席卷するベッキーは、虚栄心に基づく世界を嘲笑するかのようである。サッカレーは、社交界を席卷するベッキーを次のように描写している。

The English men of fashion in Paris courted her, too, to the disgust of the ladies their wives, who could not bear the parvenue. For some months the salons of the Faubourg St Germain, in which her place was secured, and the splendours of the new Court, where she was received with much distinction, delighted, and perhaps a little intoxicated Mrs Crawley, who may have been disposed during this period of elation to slight the people—honest young military men mostly—who formed her husband's chief society. (428)

パリにいた英国の上流の紳士たちは、彼女の後を追いかけて回した。そんな成り上がり者を相手にする気になれなかったそれらの紳士の夫人連は、それを非常に不愉快がった。フォーブール・サン・ジェルメンあたりの客間へ行ってもクロリー夫人といえれば相当顔が売れているし、下へも置かないようにして迎えられる新しい宮廷の華やかさなども嬉しくてならず、恐らくは少々のはせ上がり気味で、そうした場所へ出入りしていた数ヶ月の間というものは、雲の上にもでも昇ったつもりになって、彼女は夫の仲間の大部分を占めている気の利かない青年将校などは、てんで相手にしなかった。

引用においてサッカレーは、成り上がり者であるベッキーが社交界で成功している姿を描写している。アーサー・ポラード (Arthur Pollard) は、「我々はいかにベッキーの美しさと性的魅力が男たちを思慮なくさせ、女性たちを嫉妬深くさせるかを見る」と述べているが⁵ (Pollard 120)、ベッキーが社交

界を席卷する理由は、彼女の美しさと性的魅力だけではないと思われる。「私は頭があるからああした境遇から抜け出してきたんだわ」(496)とベッキー自身が考えるように、ベッキー個人の抜け目のなさやそれ相当の努力によるところも大きいと考えられる。一方でベッキーが「昔父のアトリエで会っていた人たちのところへ帰って行ってその仲間入りをすることはできないわ。今ではあたしたちの家を訪ねて来るのは、ポケットに煙草のよじったのなんかを入れた貧乏画家じゃなくて、ガーター勲章などをつけた貴族たちなんだもの」(496)と考えていることを示すことにより、サッカレーはベッキー自身が階級の上昇を認識していることを示している。ベッキーは社交界を席卷するだけでなく夫のロードンを圧倒する。ロードンは、サッカレーが「サムソンがデリダに押し込められて、怪力の根元だった頭の毛を切られてしまったという形である」(535)と表現するほどまでに妻に頭が上がらなくなる。サッカレーはさらにロードンを「10年前の大胆不敵な伊達者もすっかり女房の尻に敷かれてしまって、眠ったような、屈從的な、中年の紳士に成り果てていた」(536)と表現する。このことは、ベッキーの力がダンディーをしのぐほどであることを示している。

ベッキーは、「ベッキーのロードンとの結婚はほぼ計算通り成功と言ってもいいし、彼女とスタインとの関係は正真正銘私利私欲に基づくものである」と述べている (Betsky 144)。ベッキーの述べているように、ベッキーはロードンとの結婚によって成功を収めるが、一方でベッキーはスタイン卿との関係を私利私欲によってのみ考えていない。なぜならば、ベッキーがスタイン卿一家に敬意を表すのは亡くなった彼女の父シャープの絵を二枚買ってくれたことがあったからであり、サッカレーは、「この情愛の深い孤児は、その好意を有難く思ったことをいまだに忘れずにいたからだだった」(571)と説明しているからである。このことはベッキーが感謝の気持ちを持っていることと、スタイン卿が貴族の中でも暖かい心の持ち主であることを示している。スタイン卿夫人も暖かい心の持ち主であり、ベッキーが貴婦人たちから仲間外れにされているとベッキーに声をかけ、歌を披露して欲しいと言う。それ

に対し、ベッキーはピアノに向かってスタイン卿夫人が娘時代に大好きだったモーツアルトの宗教的歌曲を歌う。それがまた実に快い優しい声だったので、スタイン卿夫人もそのそばに座りこんで耳を傾け、ついにはぼろぼろと涙をこぼす。このことは、ベッキーの音楽についての能力がスタイン卿夫人を引きつけていることを示している。スタイン卿の家、普通の人が行けないような内輪の会に招かれてから、ベッキーの上流婦人としての資格が確立される。注目に値することは、ベッキーが上流社会の人々との交際においても身分の低い者に接するときに見せたのと同じ率直さを示すことである。グリゼル・マクベス (Grizzel Macbeth) 夫人に話しているフランス語をほめられたときもベッキーは「ある学校で教えておりましたし、それに母がフランス人でしたものですから」(589) と言い慎ましさを示している。このような慎ましさがあつたからこそベッキーはグリゼル夫人に気に入られる。さらに忘れてはならないことは、ベッキーがガヴァネスに必要な能力、すなわち外国語 (ベッキーの場合はフランス語) と音楽の能力をフル活用していることである。このことからサッカレーが一介のガヴァネスが家柄ではなく個人の性格と能力だけで社交界で勝負していることを示している、と考えられる。

しかしながらサッカレーは、自分の地位や快楽や社交界における進出などで頭が一杯になっていて、夫であるロードンをないがしろにしているベッキーも描写している。ベッキーが理想的主婦でないことは、夫を戦争で失いながらも夫との思い出の中で生きようとするアミーリアとのコントラストにより強められる。ベッキーは、夫と息子から離れてヨーロッパじゅうを旅して回り、「地上の放浪者」(748) となる。ベッキーはばくち打ちや評判のよくない連中と交際し、身を持ち崩すが、サッカレーは、彼女が身を持ち崩しながらも善良な側面を持っていることを読者に示している。

ベッキーの善良な側面は、彼女がドビン (Dobbin) とアミーリアとの間を取り持つことに見られる。献身的な愛を捧げながらも報われない気高い心の持ち主ドビンと彼を弄んでいるアミーリアを見、ベッキーは、ジョージがどんなにくだらな男だったかを語り、舞踏会の日にベッキーに渡した、一緒

に逃げてくれという手紙まで見せる。このことは、ベッキーがドビンの真価を見抜いたことを示している。サッカレーは、第62章で、ベッキーが生まれてから真の紳士には一度も出会わなかったことを説明するだけでなく、「我々はみんな大変いい仕立ての服を着ているだけの人なら沢山知っている。また大変行儀のいい人も大勢知っている。それから社交界の中心にいて流行界の中心を射当てたような人でも一人二人は知っているが、しかし本当の紳士ということになると、果たして幾人あるだろう？ 一つ小さな紙切れを取って、もしも自分の知人にこれと思う人があれば、めいめいその名を書いてみようではないか」(70)と読者に問いかける。そして問いかけの後でサッカレーは、「私は少しの迷いもなく私の紙片に少佐の名を書くだろう」(720)と述べている。ベッキーがドビンの真価を見抜き、ドビンとアミーリアの仲を取り持つことは、彼女が家庭教師の地位から社交界に入りこみ、その後ヨーロッパを旅して回るといふ可動性を持たなければ成り立たなかったことであり、ベッキーが可動性によって人物の真価を見抜く目を培ったと考えられるのだ。⁵

結 び

以上、*Vanity Fair* においてサッカレーがベッキーをいかなる人物として表現したかについて考えてきたが、作品においてサッカレーは、ベッキーに時代を映し出す役割を担わせていると考えられる。ベッキーは、「サッカレーの *Vanity Fair* における構造上の戦略は、ベッキー・シャープを主要人物として用いることである」と指摘しているが (Betsky 142)、*Vanity Fair* が1847年1月、月刊で世に出たとき、*Pen and Pencil Sketches of English Society* という副題がついていたことを思い起こす必要がある。このことから、サッカレーがベッキーに可動性を与え、ベッキーを通して時代を映し出していると考えられるのだ。ベッキーは、ディバティスタが「自己犠牲的で控え目な天使のような女性」(DiBattista 88)と表現するアミーリアとは対照的な女性であり、夫をないがしろにしているが、サッカレーはベッキーに最後にドビ

ンの真価を見抜く役割を担わせている。サッカレーは、時代の肖像としての作品の中で、ベッキーに可動性を与えることによって様々なことを体験させ、ドビンの真価を見抜く目を持たせた、と書いていいだろう。

注

1. *Vanity Fair* は、月刊分冊で世に出た。それはディケンズによって広まった刊行形式である。1847年1月から1848年7月まで毎月32ページの黄色の分冊が1シリーズで売られた。
2. サッカレーは第1章の前の‘Before the Curtain’で「興行人は、持って参りました人形が、全国のお目の高い方々に満足を頂きましたことを思っぴひそかに自負しております。有名なベッキー人形は、関節も殊の外しなやかで、針金で踊る具合も生き生きとしているとの評判。アミーリア人形となると少しはごひいきの数も減りますが、その彫りといい衣裳といい、職人ができるだけ念を入れたものです」(34)と述べている。このことから、サッカレーがベッキーを本当のヒロインとして印象づけていると考えられる。
3. 1837年ヴィクトリア女王になるまでに、サッカレーの人格は本質的に形成された。サッカレーは教育を受け、摂政時代のダンディーの片鱗を感じさせる人物となり、美術学生としてドイツやパリを旅したり、そこに住んだりし、相続財産を失っていき、自活するため新聞の仕事をし、父親になり、ロンドンに腰をすえ、雑誌に記事や喜劇的な短編を書くことにより、新聞の仕事の補足とした(Harden 3)。
4. ウィルバーフォースは、1784年ごろ福音主義者となり、クラパム・セクト(Clapham Sect)の有力会員になる。1787年奴隷貿易廃止協会(Society for the Abolition of the Slave Trade)を設立。1823年奴隷制反対協会(Anti-Slavery Society)を設立した(Sykes 150)。
5. ディケンズは、*Great Expectations* (1861)でサッカレーと同じように、ジェントルマンが道徳的・倫理的側面からもジェントルマンと言えるかどうかというテーマを扱っている。*Great Expectations* では、ピップ(Pip)はオーストラリアに流刑になったエイベル・マグウィッチ(Abel Magwitch)の稼いだ金でジェントルマンの仲間入りをするが、ジョー(Joe)がバーナーズ・イン(Barnard's Inn)へ来ることを知り、「もし金で彼を遠ざけておくことができたとしたら、わたしはきっと金を出したことだろう」(206)と語っている。ピップがジョ

Vanity Fair

一の真価に気づくのは、自身が遺産相続の見込みを失い、病気になったとき、ジョーが看病し、借金を払ってくれてからである。ピップと比較すると、ベッキーは彼ほど追い詰められていないにもかかわらず、ドビンの真価に気づいている。このことから、ベッキーが可動性によりいろいろな人物を見ることによって、ドビンの真価に気づいたと考えられる。

Works Cited

- Altick, Richard D. *Victorian People and Ideas*. New York: W. W. Norton & Company, 1973.
- Betsky, Seymour. "Society in Thackeray and Trollope", *From Dickens to Hardy*. Ed. Boris Ford. Harmondsworth: Penguin Books, 1982.
- Daleski, H. M. "Strategies in *Vanity Fair*", *Modern Critical Interpretations: William Makepeace Thackeray's Vanity Fair*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1987.
- DiBattista, Maria. "The Triumph of Clytemnestra: The Charades in *Vanity Fair*", *Modern Critical Interpretations: William Makepeace Thackeray's Vanity Fair*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1987.
- Dickens, Charles. *Great Expectations*. New York: Oxford UP, 1992.
- Ghent, Dorothy Van. "On *Vanity Fair*", *Modern Critical Interpretations: William Makepeace Thackeray's Vanity Fair*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1987.
- Harden, Edgar F. *Vanity Fair: A Reader's Companion*. New York: Twayne Publishers, 1995.
- Iser, Wolfgang. "The Reader in the Realistic Novel: Esthetic Effects in Thackeray's *Vanity Fair*", *Modern Critical Interpretations: William Makepeace Thackeray's Vanity Fair*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1987.
- Lougy, Robert E. "Vision and Satire: The Warped Looking Glass in *Vanity Fair*", *Modern Critical Interpretations: William Makepeace Thackeray's Vanity Fair*. Ed. Harold Bloom. New York: Chelsea House Publishers, 1987.
- Pollard, Arthur. "Surtees, Thackeray and Trollope", *The Victorian*. Ed. Arthur Pollard. Harmondsworth: Penguin Books, 1987.
- Pool, Daniel. *Dickens' Fur Coat and Charlotte's Unanswered Letters*. New York: Harper Collins Publishers, 1997.

Thackeray, William Makepeace. *Vanity Fair*. Harmondsworth: Penguin Books, 1968.
ノーマン・サイクス, 『イングランドの文化と宗教伝統』, 野谷啓二 (訳), 開文社,
2000.

***Vanity Fair*: The Characterization of Becky Sharp and the Character of the Work as a Portrait of the Age**

YOSHIDA, Kazuho

Vanity Fair: A Novel without a Hero is a novel by William Makepeace Thackeray (1811–63), first published in 1847–48, satirizing society in early nineteenth century Britain. The book's title comes from John Bunyan's allegorical story *The Pilgrim's Progress*, first published in 1678 and still widely read at the time of Thackeray's novel. *Vanity Fair* refers to a stop along the pilgrim's progress: a never-ending fair held in a town called Vanity, which is meant to represent man's sinful attachment to worldly things.

The story opens at Miss Pinckerton's Academy for Young Ladies, where the principal protagonists Becky Sharp and Amelia Sedley have just completed their studies and are preparing to depart for Amelia's house in Russell Square. Becky is portrayed as a strong-willed and cunning young woman determined to make her way in society, and Amelia Sedley as a good-natured, loveable, though simple-minded young girl.

Becky Sharp, the anti-heroine and Amelia's opposite, is an intelligent young woman with a gift for satire. Fluent in both French and English, Becky has a beautiful singing voice, plays the piano, and shows great talent as an actress. Never having known financial or social security, Becky desires it above all things. She does nearly everything with the intention of securing a stable position for herself and her husband after she and Rawdon are married. She advances Rawdon's interests tirelessly, flirting with men such as General Tufto and the Marquess of Steyne in order to get him promoted.

Marrying Rawdon Crawley in secret was a mistake. She also fails to manipulate Miss Crawley through Rawdon so as to obtain an inheritance. Although Becky manipulates men very cleverly, she does not even try to cultivate the friendship of most women. Lady Jane, the Dobbin sisters, and Lady Steyne see

right through her. Amelia and Miss Crawley are exceptions to the rule.

What has to be noticed is that Becky plays an important part in Amelia's marriage. After George Osborne's death, Amelia is obsessed with her son and with the memory of her husband. She ignores William Dobbin who has courted her for years. Becky shows her George's letter, and Amelia realizes what a good man Dobbin is. Amelia eventually marries Dobbin. Thackeray gives Becky the social mobility which makes her experience different social classes. Her social mobility makes her recognize the true value of Dobbin. Thackeray uses Becky who experiences different social classes as the character who tells Amelia the true value of Dobbin.